

鶴の湯

大名に相応しい温泉

鶴の湯を構成する 6 つの建物の中で最も古いのが、幕末に建てられた本陣です。厚い藁葺き屋根の細長くて背が低いこの建物は、昔の番所に似ており、もともとは大名・佐竹氏の家臣を宿泊させる役目を担っていました。中に入ると、客室には囲炉裏があり、主な窓にはガラスが張られておらず雨戸のみが付けられています。一室の壁の柱には、第一次日清戦争(1894- 1895)での日本の勝利を祝う落書きが刻まれています。

新本陣は、かつて大名自らが宿泊した元の本陣の跡地に建てられています。宿泊の際は、ぜひ新本陣の二階に上り、廊下に飾られた水墨画の数々をご覧ください。特に目を引く作品には、貴族の女性が薄手の衣をまとい、厚い目隠しをした男性に背中を流してもらった絵や、馬に乗った貴族や徒歩の農民が米と寝具を携えて鶴の湯へと向かっている絵、温泉周辺の山々が伐採により丸裸になっている（かつては薪のために山の木を切り倒していました）絵などがあります。警備上の理由から、大名は建物の奥に泊まり、小川に架かる屋根付きの橋を渡って専用の風呂に向かいました。

鶴の湯には 8 つの風呂（内湯、露天風呂、女性専用風呂）があります。最も見事なのは、岩と緑に囲まれた混浴の大露天風呂です。乳白色の湯につかりながら、四季折々の素晴らしい風景を眺めることができます。階段や木の幹の目隠し、注意深く配置された岩などを利用して巧みに設計され

たエントランスによって、女性でも首まで湯に浸かったままこの露天風呂に入ることができます。また、風呂が大きく湯が透明でないため、かつてのように男女を問わず大勢が一緒に入浴を楽しめます。